



大妻多摩中学校

二〇一九(平成31)年度

入学試験問題(第一回)

【国語】

時間 50分

2月1日(金)

【注意事項】 1 問題は17ページまであります。

2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

「国を選ぶか、友を選ぶか」

というギリギリの選択に迫られたときは、「迷わずに友を選べ」と言ったのは、たしかポーランド生まれで英語圏の有名な作家となったジョセフ・コンラッドだったと思います。たぶん彼は国家というものを、頭から信用していなかったのでしょうか。

「身捨つるほどの祖国はありや」

と、うたったのは寺山修司^{てらやましゅうじ}でした。国に対する ① は、誰にでもあるはずです。

年金問題ひとつとっても、いませつせと払いこんでいる年金料が、はたして何十年後に必ず老後を保障してくれるとは必ずしも思えない。そんな人たちが年金料の支払いを拒^{こぼ}んでいるのです。たぶん国を信用していないのでしょうか。

しかし、国を信用していなくても、選^{えら}ぶべき友が、はたして自分にいるのか。祖国を捨てても身を呈^{てい}すべき友情はあるのか。そこまで信頼できる友はいるのか、と自問自答して、

「いぬ」

と、自信をもって言い切ることができる人は幸せです。

中国人は長い歴史のなかで、繰り返し繰り返し国家や体制の崩壊と時代の転変を体験してきました。そのすさまじさは、この極東の島国である日本の比ではありません。

そんな積み重なった記憶と体験のなかで、中国の人びとは政治体制よりも、友人のほうが信頼できると考えてきたようです。注¹ 『易経^{えいけい}』という古い文書にもでてくる朋友^{ほうゆう}という言葉には、そんな重みがあります。

しかも、友人である期間が長ければ長いほど、その絆^{きずな}はつよくふかい。「老朋友^{ラオパウゼンヤオ}」というのは、年老いた友人のことではなく、長い歳月をかけて築きあげてきた信頼関係をあらわす言い方です。

第二次大戦で日本が敗れた一九四五年、かつて日本が支配していた地区、^{注2}外地^{がいち}では、さまざまな悲劇がおきました。

かつて満州と私たちが呼んだ中国東北地区では、一般民間人の死者、九万七千人、その他に放置された子供や婦人たち二万五千人と推測されています。

中国残留孤児として日本に帰国する人びとがニュースで報じられますが、それは外地にとり残され、母国に引揚^{ひきあ}げる機会を失った在留民のごく一部だろうと思います。

しかし、中国、朝鮮など、かつて日本国が支配者として君臨した国々で、ごく少数ではありますが、日本人が中国人、朝鮮人その他の友人の手で保護され、かばわれて無事に帰国した例があります。

旧植民地時代の支配者であった日本人は、すべて報復の対象となっても当然であった時期です。

しかし、そんななかにも、国家や体制をこえ、民族や人種の枠にとらわれずに、友人としての絆を大事にした異邦人たちがいたのです。

② そういう うらやましい信頼、信用というものは、一体どんなふうにして築くことができるのか。いま、このすべての世界に信用が失われている時代に、そんな人間関係がはたして成りたつのだろうか。

現代は家族、肉親という血縁の絆さえ危うい世の中です。

③ わたしの知人に、中流というか、中流の上くらいの暮らしをしている男性がいます。両親はかなりの資産を築いて退職し、いまは悠々^{ゆうゆう}自適^{じてき}の老後を楽しんでいるらしい。もう相当の高齢ですから、両親が世を去れば彼もかなりの遺産を相続することになるといふ噂でした。

その知人が、最近、老いた両親と衝突することが多くなったという。原因は、ご両親のお金の使い方だそうです。

七十歳過ぎまでつましく暮らしてこられたご両親が、この数年、急に大胆なお金の使い方をされるようになったらしい。

一千万円もする大型客船による世界一周クルーズに参加されたり、アフガンの荒野に井戸を掘るとか、シルクロードの乾燥地帯に

木を植えて緑化するなどという運動に多額の寄付をするとか、無名の画家や若い陶芸家を応援して海外に留学させるとか、来日するオペラやバレエはすべて鑑賞するとか、とにかく猛烈な勢いでお金を使いつつあるというのです。

「ご本人たちは世を去ったあと、お葬式代ぐらい残ればよい、とおっしゃっているらしいのですが、遺族の筆頭である知人にしてみると気が気ではないらしい。」

「残すものを残すどころか、あの調子でいけば逆におれたちが面倒みなきやいけなくなるかもしれないだよ。困ったもんだ」と、彼はため息をついていました。ぼくにも彼の焦りはわかるのですが、そのご両親の決断は素晴らしいと思わずにはいられませ

「④」

「というのが、かつてよく耳にした言葉でした。人が自分で築きあげた資産を見事に使い切って世を去るといのは、見事な生き方ではありませんか。親がみるうちに資産をへらすのを、はらはらして眺める家族関係というのは、すでにこわれてしまった関係だと思えます。」

親は子供を信頼できない。子供も親を信頼していない。子殺し、親殺しは特別なニュースではなくなりました。ふり返ってみますと、ぼく自身も早くから大人を信用していなかったような気がします。

ぼくの友人のひとりか、かつて政治運動に^⑤身を投じたことがありました。彼のスローガンは、「戦争はいやだ」「平和を守ろう」というものでした。そしてキャッチフレーズとして、

「二度と飢えた子供の顔を見たくない」

というコピーが使われていました。大勢のサポーターのなかには、有名なコピーライターもいたのです。

ぼく自身も、その友人の思想や生き方に共感するところがあり、尊敬もしていたので、応援の演説をしたことがあります。

古いことなので記憶があいまいですが、たしかスローガンとは逆に、

「二度と飢えた大人の顔は見たくない」

という話をしたはずですが。それは敗戦後、かつての植民地に難民としてとり残された体験のなかから生まれた感覚でした。パスポートをもたぬ難民として北朝鮮に収容されていたときのことです。

「飢えた子供より、飢えた大人のほうが恐ろしいのだ」

と、十三歳のぼくは思ったのです。

国に対する不信感は、いまさら言うまでもないことです。小学生のころ、ぼくは本当に国家のために死ぬと決めていたのですから。

「戦局がどんなに不利になっても大丈夫だ。日本は神国だ。最後には必ず神風が吹くのだよ」

と、^{注3} 師範学校の教師だった父は言っていました。広島や長崎に原子爆弾がおとされた後でも、まだそんなふう信じている日本国民が大部分だったのは、情けないことですが事実です。

ぼくは当時の軍幹部の養成所だった陸軍幼年学校を受験するつもりでした。それに合格しなかったら少年飛行兵か、^{注4} 予科練習生をめざすつもりでした。かならず十代でお国のために戦って死ぬ、ときめていたのです。

いま平和のなかで、私たちの国に対する信頼はほとんど失われかけています。官僚機構や政治への期待は、毎日のように裏切られつづけている。

「身捨つるほどの祖国はありや」

と、⁷ いう問いかけすら 甘⁷つちよろく感じられる現在です。
では、

「国を選ぶか、友を選ぶかの選択に迫られたときは、迷わずに友を選べ」

という言葉に、そうだ、そのとおりだ、とうなずくことにもまた自信がありません。

「身捨つるほどの朋友はありや」

と、自分に問い返してみると、思わずため息がもれてくる。

しかし、人は信じるものなくして生きていけるのか。最後は自分自身を信じるしか道はないのか。血縁の絆も信じられず、いつて仕事や職場、また国家や社会すら信じられない人間に、なにがあるのか。

信仰、という言葉がふと頭に浮かびます。神とか、仏とかいった言葉は、決して現実的ではありません。しかし、この世に信じるものがなくなった人間に残されたものは、一体なんなのでしょう。

愛、という言葉も、ふと頭をかすめます。純愛小説の流行は、いまだにつづいているらしい。

愛というイメージは、たしかに魔法のように私たちの心に温かみのある感情をよびさましてくれます。

では、愛こそが信頼できる唯一の感情か、といえは、どうしても愛と裏切り、愛と喪失、というワンセットの言葉を忘れるわけにはいきません。また、愛憎という言葉もあります。愛と憎しみとは^{注5} 双面のヤヌスのようにくつついているのです。

ふつう世間でいうところの「信用をつける」「信頼をかちえる」^⑧ くらいのことなら、基本的なノウハウもあるでしょう。生死をかけてお互いにつくしあう信頼というものは、どうやら人間が勝手に自分の力でつくりだすことはできないのではないかと思えます。

縁、という言葉、他力^{たりにき}という言葉表現、そんな運命のいたずらがそこにかかわっているような気がしてなりません。

自力で築きあげた信頼は、一夜で崩れることもあります。本当の信頼とは、たとえどんなに裏切られても後悔しない、という覚悟から生まれてくるのではないのでしょうか。

つまり、信頼とは、相手から受けるものではありません。信頼されることが大事なわけでもない。それはむしろ一方的なもので、見返りを求めない生き方です。

ぼくは少年時代に、国家に裏切られたというトラウマを抱えて生きてきました。^⑨、それは^{せんとく}浅薄で、身勝手な個人的感情にすぎないと反省することがあります。

信頼とは、賭^かけることです。裏切られてもいい。相手にされなくてもいい。結果がどうなろうと関係がない。ただ、一途^{いちず}に、と言

うと、なんとなくストーリーカーみたいな感じですが、覚悟をきめてなにかを、誰かを信頼する。それしかないような気がします。そうでない限り、永遠の不信の荒野をさまよいつづけて生きるしかないからです。

すでに甘ったるい安手やすての信頼の時代は過ぎてしまいました。これまでの信用も、世間的なブランドへの信頼も、いまは色あせてしまっています。

⑩ 信頼とは、すること、されることではない。ぼくはいまひしひしとそう感じているところです。

(五木寛之『人間の関係』(ポプラ社))

注1 『易経』……古代中国の書物。

注2 外地……第二次大戦敗戦前の、本土以外の日本の領土。

注3 師範学校……教員養成のための旧制の学校。

注4 予科練習生……旧日本海軍の飛行機乗組員をめざす練習生。

注5 双面のヤヌス……表裏一体のたとえ。

問1

① に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 不信や信用 イ 絶望や懷疑 ウ 信頼や希望 エ 理想や失望

問2

——線部②「うらやましい信頼、信用」とありますが、ここではそれほどのようなものですか。本文中の語句を用いて三十字以内で答えなさい。

問3

——線部③「悠悠自適」・⑤「身を投じた」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

③ 「悠悠自適」

- ア 自分の思うままに心静かに過ごすこと
イ 自分の遠い将来について考えて準備すること
ウ 自分の将来の理想に近づくよう努力すること
エ 裕福な生活を送り何の不安もないこと

⑤ 「身を投じた」

- ア 任せた
イ ひきずりこまれた
ウ うちこんだ
エ 死んだ

問4

④

に入れるのに最も適切なことわざを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 立つ鳥跡を濁さず
- イ あとは野となれ山となれ
- ウ 子孫のために美田を残さず
- エ 江戸っ子は宵越しの銭は持たぬ

問5

⑥

には次のア～エの四つの文が入ります。正しい順序に並べ替え、記号で答えなさい。

- ア 泣く力もなく呆然として見送る子供の表情を、ぼくはいまも忘れることはありません。
- イ 飢えと伝染病、そして酷寒が私たち日本人の上ののしかかり、栄養失調のために毎日のように死者がでる有り様でした。
- ウ その子が大事そうにその芋を胸に抱きしめて走り去ろうとしたとき、数人の日本人の大人が子供をつき倒して、芋をうばい取りました。
- エ そんな惨状を見かねたのか、ある日、朝鮮人の婦人が日本人の子供のひとりに、ふかしたきつま芋を手渡してくれたのです。

問6 ———線部⑦「甘っちょろく感じられる現在です」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア わが身を捨てるほどの祖国はあるかという問いかけをすることは安易なことに感じられるほど、私たちの国に対する信頼はほとんど失われているから。

イ わが身を捨てるほどの祖国はあるかという問いかけをすることは、私たちの国に対する信頼がまったく失われていることに気づかない、未熟な行為であるから。

ウ わが身を捨てるほどの祖国はあるかという問いかけをすることは、裏切られ続けている官僚機構や政治への期待をあきらめずに持ち続けることにつながるから。

エ わが身を捨てるほどの祖国はあるかという問いかけをすることは、グローバル化し国家という考え方がなくなった現代では意味のないことだから。

問7 ⑧と⑨とに共通して入れるのに最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ むしろ エ たとえば

問8 ———線部⑩「信頼とは、することで、されることではない」とありますが、筆者は信頼とは本来どのようなことだと考えていますか。六十字以内で答えなさい。

問9 もしあなたが極限の状況で「国を選ぶか、友を選ぶか」の選択に迫られた時は、どちらを選びますか。その理由とともに百字以内で答えなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしております。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

「私」(雨宮鳩子)は、鎌倉でツバキ文具店を経営している。文房具を売るだけではなく、依頼者に代わってはがきや手紙を美しい字で書く代書も行っている。

少年がツバキ文具店に現れたのは、世の中がゴールデンウィークに入る直前の、ある晴れた日の午後のことである。

「こんにちは」

おなかの底から寄り道せずに声になったような、

① 声がする。顔を上げると、野球帽をかぶった少年が立っていた。

「はじめまして、僕、鈴木タカヒコといいます。ちよつと代書の相談にのつてもらいたくて、北鎌倉から来ました。」

えーっと、雨宮鳩子さんで間違いありませんか？」

見た目の印象よりも、ずっとしつかりしている。あともう少して、声変わりしそうな声だった。

顔も手足も、よく陽に焼けている。だから、私は最初、タカヒコ君の目が見えないことに全く気づかなかつた。けれど、どうやらタカヒコ君は視力をすでに失っている。さつき、タカヒコ君が何かを探るようにながら机の角に触れている姿を見て、^② そうだと気づいたのだ。

「こちらに、どうぞ」

私は椅子を出した。

けれど、どうぞと言われても、果たして椅子の場所がわかるのだろうか。こんな時、とっさにどう手伝ってあげていいのかかわからなくなる。急に体を触られたら、逆にびつくりしてしまうかもしれない。

「えーっと、なんとなく声のする方に歩いてますから、大丈夫です」

③ 私の動揺が伝わったらしい。タカヒコ君が、落ち着いた声で言った。

商品の置かれた棚と棚の間をゆっくりと進みながら、タカヒコ君が私の方へと向かってくる。椅子に腰かける時だけ、ほんの少し介助した。

「ありがとうございます」

タカヒコ君は、とても礼儀正しい少年だった。

「今、何か飲み物を用意してきますね。タカヒコ君は、冷たいのとあったかいの、どっちがいいかしら？」

私からの問いかけに、タカヒコ君は少し考えてからしつかりとした口調で言う。

「水をくれますか？ 今、ずっと歩いてきたので、ちよつとだけ喉のどが渇かわいています」

私はなんだか、^④大人の人と話しているような気持ちになった。

「氷は入れる？」

「二、三個、入れてもらっていいですか？」

タカヒコ君が水に口をつけてから、私は改めてたずねた。

「さてと、どんなご依頼でしょう？」

タカヒコ君は、まっすぐに私の目を見て言った。

「僕、おかあさんに手紙を書きたいんです。もうすぐ、母の日なので、カーネーションと一緒に、手紙をおくりたくて。

僕は、ほとんど目が見えません。読むのは点字を使っているし、何かを伝えたい時は話して伝えます。だから、文字が書けなくても、ふだんはそんなに困りません。でも、おかあさんには、ふつうの子どもみたいに、手紙を書いてみたいんです」

タカヒコ君を見ているだけで、タカヒコ君のおかあさんがどんなに彼を愛情たっぷりに育てているかが伝わってきた。

「タカヒコ君は、おかあさんに、どんな手紙を書きたいの？」

私からの質問に、えーっと、とつぶやいてから、

「毎日、お弁当を作ってくれて、ありがとう、かな。あ、あと、」

タカヒコ君が、そこまで言って言葉を濁す。

「あと、なあに？」

優しく問いかけると、しばらくしてからタカヒコ君は、妙にもじもじしながら言った。

「おかあさんが、僕のおかあさんで、よかった、って」

私は思わず泣きそうになってしまった。タカヒコ君は、顔を真っ赤にしている。

おかあさんが、僕のおかあさんで、よかった。

そんなことは、人生の ^{注1}晩年を迎えたり、親を失ってから、やっとそういう心境になれるのがふつうなんじゃないだろうか。私

だって、 ^{注2}先代が自分の祖母でよかったと思えたのは、先代が亡くなってからだ。タカヒコ君は、この若さで、もうそんな大事な

ことに気づいている。

「おかあさんは、優しい？　どんなおかあさんか、教えてくださいませんか？」

タカヒコ君みたいな少年が息子だなんて、おかあさんはたまらないだろう。

「おかあさんは、怒るとめっちゃくちゃ怖いんです。でも、ふだんは優しく、夏になると、河原にメダカをとり連れて行ってくれ

たり、あと、バーベキュー行ったり。でも、いくら僕が見えないからといって、いきなりほっぺにチューとかするのは、ちよつ

と勘弁してほしいけど」

タカヒコ君が、ぶつとふてくされる。きつとおかあさんは、こんなタカヒコ君が愛しくて、思わずチューをしてしまつのだろう。

「視力は、どんな感じ？」

こんな質問をしても、タカヒコ君ならきつと大丈夫だという確信があった。

「太陽の明るさと、夜の暗さは感じる事ができます。だから、明るい場所にいると、世界が明るくなるんです。おかあさんは、あ

んまり日向ひなたにいると日射病とか熱中症になるんじゃないかって心配するんですけど、僕は太陽の下にいるのが好きなんです」

タカヒコ君の言葉通り、タカヒコ君には太陽に育てられたみたいなの、^⑥ゆるぎのない健全さがあった。

「タカヒコ君、私、ひとつご提案があります」

背筋を伸ばして、私は言った。きつと、タカヒコ君には、すべて見えているのだ。^⑦何も見えないということは、すべてが見えている、とも言えるのかもしれない。だからきつと背筋を伸ばす私の姿も、心の目には映っているに違いない。

「私が代書することは可能です。でも、今回は、タカヒコ君が自分で書いてみたらどうかと思いました。そのお手伝いを、私がするというのは、どうですか？」

何よりも、^⑧タカヒコ君本人の字がプレゼントになると思ったのだ。

「僕が？ 自分で手紙を!？」

タカヒコ君にとっては、予想外の提案だったらしい。

「もちろん、タカヒコ君が自分で書けないところは、私が責任をもってサポートします。そんなに長い手紙ではないし、少し練習すれば、タカヒコ君も書けると思うの」

しばらくして、タカヒコ君は、わかりました、と静かに答えた。

この日は、手紙に書く文章を決めるまでの作業をやった。タカヒコ君の希望は、なるべく漢字を使うことと、字を小さくして書くことだった。平仮名を大きな字で書くことは、できるらしい。でもそれだと、子どもが書いたみたいで嫌なのだと、小学六年生のタカヒコ君は主張した。

^⑨年相応の手紙を書いて、母親にかっこいい自分を見せたいというタカヒコ君の^{注3}男気を^⑩垣間見るようで、私はすっかり、タカヒコファンになってしまった。

タカヒコ君には明日もう一度ツバキ文具店に来てもらい、一緒に練習してから本番の手紙を書くことになった。
タカヒコ君を見送ってから、ぼんやり外を眺めていた。

木漏れ日の中で、蝶が飛んでいる。飛べることが、楽しく嬉しくて嬉しくて仕方ない、とでもいうように、蝶は、ふわりふわりと宙を舞

う。まさか自分が誰かに見られているなんて、^⑪つゆほども思わずに、ただただ一心に踊っている姿が美しかった。
今、ここに生きている幸せを、全身で表している。

(小川糸『キラキラ共和国』〔幻冬舎〕)

注1 晩年……一生の終わりに近い時期。

注2 先代……親のいない「私」を育ててくれた「私」の祖母で、ツバキ文具店の前の経営者。

注3 男気……男らしい気質。

問1 ①に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア きれいな イ 弱々しい ウ まっすぐな エ 男らしい

問2 ——線部②「そくだ」の指し示す内容を、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問3 ——線部③「私の動揺」とありますが、「動揺」したのはなぜですか。その理由を、本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問4 ——線部④「大人の人と話しているような気持ちになった」とありますが、その理由として最も適切でないものを、次のア

エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア タカヒコ君が、どう話すかを一つ一つ考えながら、礼儀正しく話しているから。

イ タカヒコ君が、「私」の問いかけに対して、はきはきとわかりやすく答えているから。

ウ タカヒコ君が、とても落ち着いた声で、その上しつかりとした口調で話しているから。

エ タカヒコ君が、まっすぐに「私」を見て、自分の要求を拒絶できないように話しているから。

問5 ——線部⑤「妙にもじもじしながら」とありますが、このときのタカヒコ君の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エの

中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 情けない イ うれしい ウ 照れくさい エ 面倒くさい

問6 ——線部⑥「ゆるぎのない健全さ」とありますが、この様子として最も適切でないものを、次のア～エの中から一つを選び、

その記号を答えなさい。

ア 「私」の質問に、自分は間違ったことを言わないという自信いっぱいに答えている様子。

イ 「私」の質問に、敬語を正しく使って、お母さんが好きだという理由をはつきりと答えている様子。

ウ 「私」の質問に、目は見えなくても太陽を感じることはできるということを嫌がらないで答えている様子。

エ 「私」の質問に、かっこつけることもためらうこともなく、しつかりと元氣よく丁寧ていねいに答えている様子。

問7 ——線部⑦「何も見えないということは、すべてが見えている」とありますが、この意味として最も適切なものを、次のア～

エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 目が見えないけれど、心の中では、周りの様子や他の人の思いや考えなどが分かっているということ。

イ 何も見えないことは本当だが、勘が鋭いので、自分の周りで何が起きているのかを推理して言うことができているということ。

ウ 何も見えないと言っているが、見えないふりをしていだけで、本当は周りのことも「私」のことも見えているということ。

エ 目は見えないが人の気持ちを感知取することはできるので、その人が正直に言っているのかうそを言っているのかが分かっているということ。

問8 ———線部⑧「タカヒコ君本人の字がプレゼントになる」とありますが、あなたはこの「私」の考えについてどのように思いますか。その理由とともに百字以内で答えなさい。

問9 ———線部⑨「年相応の手紙」とありますが、具体的にはどのような手紙のことですか。その答えとなる一文を本文中から抜き出し、その最初の八字を答えなさい。

問10 ———線部⑩「垣間見る」・⑪「つゆほども思わず」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

⑩ 「垣間見る」

ア じっと見る

イ ちらっと見る

ウ ぼんやり見る

エ はっきり見る

⑪ 「つゆほども思わず」

ア 本当に思わない

イ あまり思わない

ウ 今回も思わない

エ 少しも思わない

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 台風24号は、猛烈な勢力にまでハツタツした。
- ② けがのため、ピッチャーがコウタイした。
- ③ 映画の撮影現場がコウカイされた。
- ④ 新製品の発売で、お店の前にギョウレツができた。
- ⑤ 半年間の出場停止処分がカされた。

問2 次の①～⑤の「意味」に合うように、空欄に漢字一字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

- ① 意気 合…… 「意味」 互いの気持ちや考えなどが、ぴったりと一致すること。
- ② 馬耳東 …… 「意味」 人の意見や注意などを気にもとめないで聞き流すこと。
- ③ 興味 位…… 「意味」 おもしろいかどうかだけを判断の基準にする傾向。
- ④ 前 不覚…… 「意味」 正常な判断ができなくなるさま。
- ⑤ 戦苦闘…… 「意味」 強敵相手に苦しい戦いをする事。

以下余白

